

日赤神奈川県支部 教育研究会 生徒会参加活動報告書

「3.11 を学びに変える ～あの日の大川小の校庭に向き合う～」

日 時：2月11日(火)14:00～16:00

場 所：日本赤十字社神奈川支部

参加者：2年 三浦彩夏 1年 三浦果穂 齋藤夏菜美 長田希華

報告者：1年 長田希華

補筆 武田 校正 荒川 伊藤



◆ 活動の理由と目的

- ①. 本校生徒会として防災・減災につながる活動を率先して取り入れる
- ②. 一つ一つの講習や研修活動を通じて、私たちの活動の指針を作っていく
- ③. 私たちは災害被害に対し真摯に向き合い、やるべきこと、考えるべきことを共有する

◆ 内容

9年前の東日本大震災当時、女川町の中学校の国語の先生をしていた佐藤敏郎さんのお話を聞きました。始めに震災当時の町の混乱状況や、ほんの少しの防災意識の違いで生死が分かれてしまった話を伺いました。そして、震災から何年たっても話題に上がる「大川小学校」での出来事についての話もして頂きました。地震が起きてから避難決定までの判断が遅れ、小学校の児童74名、先生10名の84名の命が失われたことを伝えられました。しかも地震発生から51分後にあった悲劇でした。それは避難開始からなんと1分後だったのです。しかも大川小学校では裏山には避難せず、川に向かって避難したというのです。佐藤さんは同じ先生として思ったといいます。「津波に流される瞬間にその小学校の先生たちは一人でも児童を助けようと抱きしめただろう」と。

佐藤さんは、この大川小学校で娘さんをなくしました。そしていつかは、大川小学校に勤めたいという夢を持っていました。どちらもなくなってしまったのです。佐藤さんは、強調していた言葉があります。「念のため」という言葉です。「念のため」に逃げる。確かにそれだけでよかったのです。たったそれ

だけのことができなくて子供たち先生たちの命が失われるのは、とても悲しいことです。

私たちは実際には被災していない身です。しかも9年前ということは6歳～7歳ですから、小学校1～2年で震災そのものの記憶もほとんどありません。ですから、人に語れるだけの話の内容を持ちません。

佐藤さんは、そんな私たちに、震災の大きさ、悲惨さを伝えてくれました。そして震災後に強く生きている姿を見せてくれました。娘さんが亡くしてしまった

ことを知らずに勤務先の中学校で対応に追われていた佐藤さんが、お父さんの顔になれたのはいつだったのでしょうか。震災は日常を奪うものだ、改めて思いました。約2時間の講演会でしたが、とても心に響くお話でした。

本当は、佐藤さんのお話の内容を三浦学苑の生徒の皆さんにしっかり伝えられるといいのですが、佐藤さんのように話をすることはできません。せめて、私たちにできることは、当日の様子をお伝えするだけです。

◆感想

今回のお話の中で一番印象に残っているのは、津波によって家族や大切な人を亡くした子たちが書いた俳句です。今まで当たり前にはいたはずの人が突然いなくなり、自分の住んでいた町も津波によって壊されてしまい、その行き場のない気持ちを、心に閉じ込めていた生徒さんたちが書いた俳句です。私は涙が出てしまいました。そして止まりませんでした。今回のお話で、少しの時間も大切に生きようと思いました。

佐藤さんは、こうしたお話を語り伝えるため、いろいろなところで講演活動を行っています。私たちは、佐藤さんたちの活動を応援できたらと思いました。



記：生徒会1年 長田希華